

令和 5 年 5 月 6 日現在

機関番号：32617

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21991

研究課題名（和文）ナタリー・サロートの「トロピスム」のための文学にみる20世紀的表現の展開

研究課題名（英文）The Evolving Characteristics of 20th-Century Literary Expressions in Nathalie Sarraute's Literature of Tropisms

研究代表者

後藤 はるか (Haruka, Goto)

駒澤大学・総合教育研究部・講師

研究者番号：40751110

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ナタリー・サロートの文学に20世紀的な表現の特徴を検証しながら、新たな視点でその作品を捉えることを目標とした。基本となる作品分析に加え、これまで知られることのなかった自伝的情報として、アン・ジェファーソンの評伝を手がかりとし、実存的な側面からの研究も行った。こうした研究を通して、ヌーヴォー・ロマンの作家としてカテゴライズされがちなサロートが、じっさいは、「新しい小説」を書くことを試みるのではなく、「新しい対象」を見出してゆくことを、1930年代から一貫して試み続けたのであり、さらにはその対象へ向けられる彼女の感性に21世紀的な感性の萌芽が認められるということを示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ナタリー・サロートの実存的な情報によって、とくにピエール・ジャネからの影響やボーヴォワールとの衝突を扱ったことで、初期作品（『トロピスム』から『マルトロ』まで）について、新たな作品解釈を提示できた。また、その解釈を通して、サロートが「新たな現実性」と呼び、作品に提示してゆく対象が、21世紀の私たちが具体的に問題視するようになった事象（アイデンティティの揺らぎ、ジェンダーやハラスメント等）に結びつくことを明らかにした。そうした事象を表現するその言葉づかいは、20世紀ならではのかたちでその文学の独自性を成していることから、その感性を育んだサロートの文学経験を分析する重要性を提示できた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine the characteristics of 20th century expressions in the literature of Nathalie Sarraute, and to grasp her works from a new perspective.

In addition to the basic analysis of the work, I conducted research from an existential perspective, using Ann Jefferson's critical biography as a clue for previously unknown autobiographical information.

This study revealed that Sarraute, often categorized as a nouveau-romantic writer, consistently pursued the discovery of "new subjects" from the 1930s, rather than striving to write a "new novel". Moreover, her sensitivity towards these subjects showed the emergence of 21st-century sensibility.

研究分野：20世紀フランス文学

キーワード：フランス20世紀文学 フランス20世紀小説 ナタリー・サロート ニューヴォー・ロマン ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

サロートは、フランスの文学全集のなかでもとりわけ権威があるとされる「プレイヤッド叢書」(ガリマール社)に生前に収められた数少ない作家の一人である。彼女は、20世紀文学において重要な役割を果たしたが、正当に評価されるまでにはかなり長い時間がかかった。私たちはその時間を、サロートの作家としての才能の開花までの時間の問題と捉えるよりも、私たちが現在かろうじて振り返るための距離をもちはじめたばかりの、20世紀という時代に固有のうねりの中で、彼女が作家として社会的にあたりまえに受け入れられるまでにかかった時代性の問題として捉える必要がある。

「プレイヤッド叢書」の全集がジャン＝イヴ・タディエ(ソルボンヌ大学名誉教授)の編集によって出版されたのは1996年だが、サロートは、この翌年、『開けて』という本を出版している。これは、人の生涯を輪郭の明瞭な一筋の物語として提示するような伝記の表現を好ましく思わなかったサロートらしい、一冊の全集が自らの仕事の全体像を学術的に作り上げることを阻止するかのタイトルとも映る(2011年に増補版が出版され、二つの版が存在する)。また、サロートの手書き原稿は、1996年にフランス国立図書館に寄贈されたが、資料へのアクセスは、2036年まで認められておらず、研究者には明らかに資料の欠けた状態といえる。2019年に、全集の編集にも関わった研究者アン・ジェファーソン(オックスフォード大学名誉教授)が、この状況を受けとめた上で決断し、評伝『ナタリー・サロート』(フラマリオン社)を完成させた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現段階で可能なサロートの仕事の特性と全体像とを、20世紀の時代性に関連させながら提示することにある。作家の作品がジャンルごとに区切られた研究は屢々見つかるが、これまで、文学研究において、それとは異なるアプローチを意識的に試みてきた。本研究でも、サロートをはじめとする同時代作家たちの多様なジャンル(小説、劇、ラジオ作品、テレビ作品、映画など)における創作を扱った、パリ第8大学に提出した博士論文で実践した方法と経験を生かした研究を行う。

3. 研究の方法

本研究の課題名に含まれる「トロピスム」という言葉は、「光に向かったり光を避けたりする植物のうごき」を示す生物学の用語であることを、人が、日々何かを不意に感じたりはしても明確に捉えることのない、すぐに忘れ去られる「感覚」のうごきを示すためにサロートが選んで名づけた言葉である。サロートは、言語化されてしまえば固定した観念に回収され別のもものとなる、とるに足りないその感覚にひたすら拘り、しかもそれを描写するのではなく、それが引き起こされるような表現を模索した。作家は、新しい小説表現のための小説を書くのでも、新しい劇表現のための劇を書くのでも、新しいラジオ表現のためのラジオ作品を書くのでもなく、ただ「トロピスム」のために作品を作り、独自の文学を築いた。

本研究は、サロートの「トロピスムのための文学」について、次の三つのテーマを具体的に掲げて検討した。(1)19世紀文学から引きついだ要素がどのようにサロートによる文学表現の方向性を決定づけたのか、(2)20世紀という時代の出来事のなかで、作家はいかなる表現方法へと導かれたのか、(3)サロートの文学は文学史上で今、どう位置づけうるのか。

4. 研究成果

上述した研究の方法(1)について、サロートが影響を受けた作家を辿ってみると、かならずしもフランス文学の作家に留まらない豊かな文学経験が明らかとなった。ドストエフスキーやヴァージニア・ウルフの影響が多岐であることはよく知られているが、イギリス文学のアイヴ・コンプトン＝バーネット(1884-1969)から長きにわたって影響を受けており、その重要性が明らかになった。イギリス文学研究におけるウルフ研究に比べると、コンプトン＝バーネットについては、国内での研究が非常に少ないため、今後さらに研究を続け、サロートの関心をより具体的に明示するという課題ができた。作家になる前からの文学体験としては、トーマス・マンの作品がとくべつに重要である。また、フランス文学からの影響としてしばしばプルーストやフロベールの名があげられるが、じっさいにはジッドの影響が相当に大きいこと、また同時代の作家(クノー、セリーヌ)から大きな刺激をうけていたことが明らかになった。ただしその影響のかたちについて具体的な研究することは今後の課題である。

研究の方法(2)については、アン・ジェファーソンが評伝で示した実存的な情報が、サロートがロシア生まれの移民の女性作家として、どのような立場におかれていたのかということ、そして、これまで国内ではほとんど知られることのなかったサロートのユダヤ人としての第二次世界大戦中の生活や家族との関係、レジスタンスとしての行動等を明示したため、それが手がかりとなって、彼女の執筆活動がどのように展開されたのか、あるいは休止せざるを得なかったのか、そして何を直接的に描くことができ、何を描くことをしなかったのかを分析することができた。その分析の一部を、令和2年度の論文「ナタリー・サロートのはじまりのトロピスム」

にまとめた（『駒澤大学外国語論集』第30号）。

研究の方法（3）については、第二次世界大戦サロートの作家活動が、周囲の作家たち、ヴィオレット・ルデュックやフランシス・ポンジュ、ロブ＝グリエ、マルグリット・デュラス、そしてフランソワ・モーリヤックなどとの非常に豊かで広い文学的交友関係やフランス以外の国での活発な活躍とともに続けられたということを検討し、また、とくに、ジャン＝ポール・サルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールにたいするサロートの態度や考え方に着目し、分析してゆくことで、この作家の文学の方法や、それとともに育まれた思想、作家の問題意識が、20世紀的というよりも、21世紀的な問題に結びつくことを明らかにすることができた。そして、21世紀的な感性の萌芽とも見える事象が、20世紀的な表現でしかあらわし得ないということがありうる例としてサロートの作品を分析するように努めた。これについて、令和4年度の論文「ナタリー・サロートと見出されゆく現実性：『トロピスム』から『プラネタリウム』まで」にまとめた（『駒澤大学外国語論集』第34号）。

また、本研究を通して、サロートの感性とその関心の広がりを辿ったことで、ロシアで生まれ、移民ユダヤ人の子としてフランスに育ち、ロシア語、フランス語、英語、ドイツ語の四つの言語を話すようになっていったなかで形成された作家であったからこそ、21世紀に結びつくような新しい感性の持ち主となったことが明白になった。そのようなサロートのキャトリングルな感性を検証するために、フランス文学に留まらない広い視野をもって文学研究を行ってゆくことも今後の課題になった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 後藤はるか | 4. 巻 30 |
| 2. 論文標題 ナタリー・サロートのはじまりのトロピスム | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 駒澤大学外国語論集 | 6. 最初と最後の頁 143-170 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 後藤はるか | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 ナタリー・サロートと見出されゆく現実性：『トロピスム』から『プラネタリウム』まで | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 駒澤大学外国語論集 | 6. 最初と最後の頁 97-123 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号） | 所属研究機関・部局・職 （機関番号） | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|